



遠藤 薫

学習院大学法学部 教授

訳者あとがきによれば、本書は、「ビッグデータやデジタル実験から得られるデータの活用、ウェブやウェアラブルデバイスを用いた新しいサーベイ法、機械学習・自然言語処理・人工知能を用いた分析手法の援用など、デジタル時代の社会科学——これらを総称して『計算社会科学』と呼ぶ』(Salganik〈訳者あとがき：375〉)についての世界初の教科書である。

「教科書」というにふさわしく、平明な文章で(訳文も大変読みやすい)、読書案内や章末の演習問題なども充実しており、授業で使われることが意識された丁寧な作りである。次年度から「計算社会科学入門」という講義をするなら、本書は素晴らしいテキストとなるだろう。

ただし、「教科書」であるからといって、この本を読めば、計算社会科学を使って何らかの調査なり分析のノウハウを得られるということではない。本書が提示するのは、「ビッグデータ、サーベイ、実験、マスコラボレーション、倫理を含むデジタル時代の社会調査についての包括的な展望」(vi)である。

「社会調査という目的にとって、デジタル時代のもっとも重要な特徴は、いたるところにコンピュータが存在するという点にある」(p.3)と著者はいう。そして、「こうした遍在するコンピュータは単に計算するだけでなく、情報を取得し、保存し、伝達するようになりつつある」(p.3)。「疑い深い人の中には、こうした性能は何も新しいものではないと指摘する人もいるかもしれない」(いまだ多くの社会学者はこの「疑い深い人」に属するが、「疑い深い人が見落としているのは、同じものが多く集まれば、ある時点で別のものになるということだ」(p.5)。

本書の読者として著者が想定しているのは、社会学者とデータサイエンティストである。社会学者は「社会行動を研究する訓練と経験を積んでいるが、



デジタル時代の生み出した機会を利用することには慣れていない」。他方、データサイエンティストは、「デジタル時代のツールを使うことは得意である一方、社会行動の研究については新参者」である。この両者を結びつけることの重要性はさまざまなところで議論されている。しかしその困難も周知である。著者は、このハイブリッドを成功させる最善の方法は「研究デザイン」にあると主張する。おおまかに要約すれば、「社会調査の基本

に立ち返った上で、現時点で利用可能なアプローチを組み合わせる」といったところだろうか。そこにこれまでの学問的蓄積とフロンティアを切り開く挑戦力との相乗効果が発生する。

だからこそ、本書の中で「倫理」の章が重要な位置を占めることになる。デジタル時代には、データを集める力を持つ者、それを目的に合わせて分析できる者たちが、データをつくり出す者たち(つまり、無数の行為者たち)に対して圧倒的な権力を持つ。権力を意図的に行使する者もいるが、まったく意

識することなく結果として混乱を招く者もいる。近年世間を賑わす選挙スキャンダルや情報操作問題などは、みな同根である。いいかえれば、今日では、これまでのように客観中立な「聖なる社会調査」というような観念の中にまどろむことが困難になりつつあるということでもある。

著者は倫理に関して、「既存のルールに沿って研究を評価するだけでなく(中略)より一般的な倫理的原理に沿って研究を評価すべきだ」と主張する。つまり、従来の分野内基準に満足することなく、「倫理」の根源に立ち返って「調査」「研究」を再検討することを要請されているのである。

紙数の都合上、本稿ではこれ以上論じることはできないが、いずれにせよ、本書が、社会に関する調査、研究に携わる者にとって必読の書であることは間違いない。

ビット・バイ・ビット

デジタル社会調査入門

マシュー・J・サルガニック 著

瀧川裕貴・常松 淳
阪本拓人・大林真也 訳

有斐閣
2019年
A5判, 466頁
4,000円+税